

2023年11月14日

宝ホールディングス株式会社 2024年3月期第2四半期決算説明会 質疑応答内容

【質問① 宝酒造の価格改定について】

Q：昨年10月に価格改定をして、2024年3月期第2四半期で一巡をしたということだが、下期と来期のコストの見通し、追加の値上げが必要かどうかを教えてください。

A：コストアップについては、昨年と比べると落ち着いた印象を持っており、価格改定効果で吸収できているので、さらなる値上げは現時点では考えていない。しかし、国際情勢や為替の変動による重油等原材料価格のコストアップの状況を把握したうえで、収益を圧迫することになるなら、値上げを考えることになる。

Q：仮に再度値上げをする場合、価格転嫁を消費者に受け入れてもらうため、どのような価値を訴求していくのか。

A：あくまでも仮定の話になるが、これまでと同じ商品を単純に値上げするというのではなく、消費者のニーズに従って、これまでとは違う、付加価値の高い商品を提供することで、応分を負担いただくようなことになろうかと思う。

【質問② 宝酒造のコストアップについて】

Q：下期の計画で、粗利率は横ばいか少し改善しているように見えるが、下期に価格改定は織り込んでおらず、コストアップも前期並みに見ているということか？

A：下期は、為替の見通しをやや円安にしたところがコストに効いている。

【質問③ 宝酒造インターナショナルの市場環境と成長性について】

Q：2024年第1四半期と第2四半期を見ると、増収率が第2四半期にかけてやや小さくなっている印象を受ける。米国ではインフレ疲れ、欧州も消費動向に懸念がある中で、海外事業の需要の強さをどうとらえているか。

A：海外事業、特に海外日本食材卸事業は、インフレの影響を受けており、第1四半期（1－3月）よりも第2四半期（4－6月）は鈍化していると思っている。後で振り返ると、第1四半期がピークとなる可能性は非常に高い。足元では特に9月が厳しい状況になっており、そういう中での通期業績予想となっている。

しかしながら来年にかけては、潜在的成長率からしても、そこまで落ち込みは続かず、成長の方向に戻るのではと思っている。日本食を中心とした当社事業に対する需要は底堅いものがあり、インフレ等の影響は受けるが、成長の方向にあるのは間違いないと思っている。

【質問④ 洋酒事業と国内事業とのシナジーについて】

Q：洋酒事業と国内の宝酒造で、商品開発やブランド育成等のようなシナジーを生み出せているか教えてほしい。

A：和酒を中心とした宝酒造と洋酒事業との直接的なシナジーは見出しにくいと考えている。一方で、洋酒事業は、エイジインターナショナルが販売するブランドン、トマーチン社が販売するトマーチンブランドは非常に高い利益率があり、宝酒造は、洋酒の高収益な販売手法等学ぶべきところはあると思っている。

【質問⑤ Vision について】

Q：Vision で掲げる「Smiles in life～笑顔は人生の宝～」について、5月に新聞広告を出しているが、目立たない印象がある。今後の社員への浸透、社会へのアピール、グループとしてのアイデンティティの確立についての考えを教えてほしい。

A：今年度、中期経営計画2025がスタートした年で、中計の全体方針の説明で、海外含め、直接事業場に赴いて説明を重ねるなど、浸透策を進めており、社内での浸透はできていると考えている。1度の新聞広告でイメージをすぐに変えるのは難しく、時間がかかるかもしれないが、引き続き地道に進めていきたい。